

FD GUIDE

2015・12
 創刊号



— 国大生の学びの充実への取り組み —

学生の自発的な学修を促すシラバスへ

平成 28 年度開講の授業について、シラバスの入力が始まるのは平成 28 年 1 月 8 日からになります。本年度「授業設計と成績評価ガイドライン」の策定に伴いシラバスを改修し、変更、追加になった項目があります。学生の自発的な学修を促すシラバスに向けて、変更、追加になった項目についてご留意いただきたく、ご理解とご協力をお願いします。

① 履修目標と到達目標の分離

現在のシラバスは「履修目標・到達目標」が1つの項目となっていますが、改修されたシラバスでは、履修目標と到達目標を入力する項目が分離されています。なお履修目標は授業で扱う内容（授業のねらい）を示す目標であり、より高度な内容は自主的な学修で身につけることを必要としている段階です。到達目標は授業を履修した人が最低限身につける内容を示す目標であり、履修目標を達成するには、さらなる学修を必要としている段階です。この目標の定義を踏まえて、履修目標、到達目標の設定をお願いします。

② 授業時間外の学修内容の明示

単位の修得には、授業時間外に予習や復習を行うことが必要とされています。現在のシラバスは授業時間外の学修内容を記述する項目は設けられていませんでしたが、今回のシラ

バス改修で授業時間外の学修内容を明示する項目が必須項目として設けられています。授業全体を通して予習すべき内容、復習すべき内容を入力してください。

③ 「成績評価の基準表」の明示

教員間の成績グレードに対する認識の統一と、学生が成績グレードを認識できるように「成績評価の基準表」を導入しました。成績評価の基準表では、「秀」「優」「良」「可」「不可」の基準を示し、成績グレードと履修目標、到達目標との関連を示しています。成績評価の基準表は、各科目のシラバスにある成績評価の基準の項目の中に掲載しています。

④ 授業別ルーブリックの作成

教員が科目ごとにシラバス上で授業別ルーブリックを作成することになりました。これは、授業における評価の基準、評価の項目を明確にするとともに、教員と学生の授業内容、評価に対する認識の共有を図ることを目的としています。ルーブリックによって学生が授業で履修する項目と水準を認識することができ、授業に適した自主的な学修を促す効果が見込まれます。授業別ルーブリックの作成マニュアルは、大学教育総合センターホームページ（www.yec.ynu.ac.jp/）に掲載しておりますので、シラバス作成の際にご活用下さい。

「FD GUIDE」の発行について

FD 推進部では、これまで FD ニュースレター（26 年度からは AP/FD ニュースレター）を発行してきましたが、27 年度よりニュースレターに加え FD GUIDE を発行し、授業改善に役立つ情報など情報発信に努めてまいります。「私の授業の工夫」コーナーでは教員の皆さまからの投稿をお待ちしております。お気軽にご連絡下さい。

AP/FD ニュースレター（通号第 33 号）を発行しています

AP/FD ニュースレター（通号第 33 号）を各先生方に配布し、Web 上に掲載しています。大学教育総合センターホームページ（www.yec.ynu.ac.jp/）からご覧になれます。ぜひご覧下さい。

掲載記事：平成 27 年度「授業設計と成績評価ガイドライン」の策定について、就業力の可視化①、用語解説「ルーブリック」とは

青木 洋 教授 (国際社会科学研究院)

専門分野：経営史 担当科目：比較経営史 I・II

楽しく学ぶ、みんなですべて学ぶ

● 担当授業の概要紹介

欧米と日本の産業・企業の歴史を学ぶことで、経営学の理解を深めていく授業です。毎回授業終了後、学生は授業に関連した話題を自由に調べ、授業支援システムにコメントを投稿します。授業はその紹介から始まり、その後、質問→ディスカッション→発言→説明のサイクルを、1回の授業で3~4回行います。ディスカッションは席の近い者同士でまず行い、その後、クラス全員で行い、答えを出していきます。

● 授業において工夫していること

経営学部で歴史の話を一方向的にすると、学生は集中力を切らし、眠くなるか、おしゃべりをはじめます。これをどう阻止するかが最初の課題でした。結論としては、教員はできるだけ説明せず、学生に多く考えさせ、議論させることに尽きるとしています。教員の説明は最小限に抑え、学生に考える時間と議論する時間を多く与えることです。そのため、自然と授業でディスカッションの時間が長くなりました。しかし、そうすると、どうしても教員からの説明が不足します。そこで考えたのが、学生自らが調べ、授業内容を補足してもらう仕組みです。それが上述のコメント投稿です。これを始めた頃は、授業の単なる感想や身近な話題が多く、とても授業内容の補足にはなりません。ところが、だんだん自分で調べた学術的内容をコメントしてくれるようになり、最近では専門的な論文を読んで、最新の学術成果をコメントしてくる学生も出てきて、正直面喰らうこともあります。私も含め、全員で考え、全員で答えを出し、全員で成長していく、そんな授業を目指しています。



吉田 圭一郎 教授 (教育人間科学部)

専門分野：自然地理学・植生地理学 担当科目：自然地理学、環境と倫理、社会科・地理歴史科教育法Ⅱaなど

実感や体感を通じて面白いと思えるようにする授業

● 担当授業の概要紹介

教員養成課程の中で担当する「自然地理学」の授業では、自然地理が取り扱う様々な自然環境に関する基礎的な知識を習得させています。具体的には、地形、気候、および植生について、地理的なものの見方・考え方を踏まえた講義形式の授業を行い、自然地理的な諸現象についてその成り立ちや形成過程を理解するとともに、自然地理に関わる諸現象について他者に分かりやすく説明できるようになることを目指しています。



● 授業において工夫していること

地理学は自然地理と人文地理からなり、自然と人間との関係を正面から論じることができる文理融合の科目です。しかし、履修者のほとんどは小学校教員、あるいは中学・高等学校での社会科の教員を目指しており、いわゆる「文系」の学生です。そのため、そもそも興味や関心が少なく、学ぶモチベーションの低い学生にどのように学ばせるべきか、次のような工夫をしながら、試行錯誤を繰り返しています。

まず、自然地理に関わる事象の説明には視覚によるものが効果的であることから、写真や図を多用するとともに、迫力のある映像を活用するなど、できるだけ自然地理学的事象に対して実感の伴った理解ができるように心がけています。また、フィールドワーク(巡検)を積極的に行い、市街地の中で見つけ出される様々な自然地理に気づかせ、自然地理に関わる事象を体感させています。さらに、自然地理がより身近なものであることを認識させるため、アニメーションやテーマパークなどを授業の導入に用いています。例えば、「アルプスの少女ハイジ」の映像を用いて氷河地形の説明をしたり、またディズニーシーにあるプロメテウス火山を題材に火山形成の話をするなど、興味や関心のない学生を授業に惹きつけようと試みています。

こうした工夫により、履修者が自然地理学を「面白い」と思い、さらなる主体的な学習へつながっていくことを最終的な目標として授業を行っています。



★
私
の
授
業
の
工
夫
①
★